
名をば神ミヤツコとなむ言いける。

天霧ありす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名をば榊ミヤツコとなむ言いける。

【Nコード】

N2986V

【作者名】

天霧ありす

【あらすじ】

高校生2年生の榊^{みかき}ミヤツコはイジメられている。残念ながら。そんな彼に一通の、しかも添付データ付きメールが送られた来た。そのメールを開けたことによって、彼の人生は変わっていく。そう彼女、「カグヤ」によって…！

プロローグ

逃げなくては

この世界、この広い世界で

一体誰がわらわの味方になってくれるのだろうか？

崩れていく意識。

混沌とした闇に自分の体が分解されていくのが分かる。

音が聞こえる。

無数の音。

色が見える。

何万色素の色。

わらわは必死に手を伸ばした。

何かを掴むように、何かを求めるように。

光が見える。

誰かそこにいるのか？

眩しすぎる光に眼を細めながら

わらわは尋ねる。

もう駄目だ。

体という感覚がない。

意識だけが自分を成り立たせている要素だと感じる。

感じる。

そこに行けばいい。

どんな悲しみが待っていても
どんな苦しみが待っていても

わらわはあなたを信じよう

いろいろ苦勞するのだよ、ワトソン君

むかしむかし

そう、そんなに遠くない現実。

どこにでもある高校で、どこにでもいそうなイジメっ子にパシリにされて何でも使われている一人の男の子…

そう僕のことだ、残念ながら。

クラスでも目立たない存在であり、そのためかよくイジメに遭うという毎日を送っている。

パシリは日常茶飯事だ。

彼らは口を揃えて言う。

「おい、パン買ってこいよ」

「ふざけんな！ 俺はお前等のパシリじゃねーんだよー!!」

…と言いたい。

しかし現実には悲しいかな、僕はただのパシリである。

声を小さくして「分かりました、ちょっと待ってて下さい」と言うしかない。

これを聞いた人は必ずこう言う。

「なんで彼らに抗議しないんだ。抗議すればいいじゃないか、嫌だつて」

それは、分かる。

でもそれが出来ていれば世の中にいるイジメラレっ子は苦勞しない。

僕が仮に今彼らにそのようなことを言おう。

どうなるかは目に見えている。

「は、お前何言ってるの？ 立場分かってないんじゃないかねーか？」
はい、ごめんなさい。

だから俺は今日もパシなられている。
そんな僕の名前は、榊なミヤツコと言う

るくに良いことなし、って合ってるかこれ？

「榊、パン買ってこいよ」

この一言が僕の昼休みへのゴング。

目の前には制服を着崩し、馬鹿騒ぎをしているクラスメート…いや僕にとってはイジメっ子。

僕はいつものように席を立ち、教室を出ようとした。

「あつ俺、今日は焼きそばパンね」

「コロッケパンでー」

「俺はいつもので」

口々に喋られる。

生憎、僕は聖徳太子でも何でもない。

「…分かった」

説明しよう。

僕の耳のレベルは聖徳太子並にレベルアップしていたのだ！

何人もの要望を一瞬にして聞き分け、正確に把握する力を持っているんだ！

これでどんな無理難題でも大丈夫！

一瞬で解決できちゃうよ

なーんて馬鹿なことを考えている間に、イジメっ子はまた騒ぎ出した。

僕はそっと教室を出て、購買部へ行くことにした。

教室は好きな人同士がグループを組んで食べる。
机をくつつけて、昨日のテレビの話でもしながら昼休みを過ごす。
それがどこの高校でも見られる当たり前の光景だ。
もちろん僕の横を通り過ぎる教室の中でも現在進行形で見られる。
けど、僕は、そのなかに、いない。

購買部　そこはまたの名を「戦場」と言う。

パンという至極の宝を求め、大将も参謀も雑兵でさえも我が身を省みず戦いに身を投じる場。

そこでは弱い者は生きられない。

強い者が正義、弱肉強食の世界なのだ。

僕はそこで勝たなければいけない。

勝たなきゃ誰かのほにやららら……！って僕はすでもうパシリだった。残念ながら。

そんなこと言ってる場合じゃなかった。

パンの山に群がる人をかき分け、なんとかお目当てのパンをゲットする。

焼きそばパン、ゲットだぜー。はあ。

勝利品のパンを手一杯に抱えながら、僕は購買部を後にしようとした。

携帯が鳴っている。もちろんバイブ設定。

僕にメールをくれる人なんて限られている。

しかし、めったに彼らはメールをくれないはずだ。

パンを目の前にあった机に置き、急いで携帯を開いた。

「メール 一件」

受信ボックスに入った一件のメール。
そのメールアドレスには覚えがない。
しかも添付データがある。

どうするか、開けるべきか、開けないべきか。

僕はつばを飲む。

「ミヤ君、どうしたの？」

目の前にいたのは僕の幼なじみ。
おまな大名アオと言う。

僕はオーナと呼んでいる。

肩までのボブシヨートの髪。目立つタイプではないが、とても優しい心を持っている。

何でこんなに知っているか。別に彼女だからとか言うのではない。
こいつとはただの、腐れ縁の仲だからだ。

「オーナか。びっくりさせんなよ」

「ミヤ君、何でそんなにパン買ってるの？ あっ、まさかまたクラス男子に……」

「そーだ、こんなことしてる場合じゃなかった！ パンだよ、パン！」

僕はパンを掴み、大急ぎで食堂を出る。

「ちょっと、ミヤ君ってば！」

「悪いオーナ、また今度！」

遅れたらどうなるか、そんなことは考えたくない。

僕は光の速度で走った。

つまり、携帯の一件を忘れていること、これに僕が気づくことはまずあり得なかった

はははと笑ってくれ

仕事をやり終えたあとは気持ちがいい。
爽快感で溢れている。

そう僕はイジメっ子達に無事任務を達成できたことを報告したのだ。
勝利品を献上して。

「おーさんきゅ」

その一言で僕の苦労は報われた。たとえそれが虐められている立場
からだとしても。

ざわめく教室。

なぜ教室にはグループというものが存在するのだろうか。

決して目に見える枠組みじゃない。そんなものは無いんだという人
もいるかもしれない。

しかし、実際に存在するヒエラルヒー、階級。

いつの間にか教室という空間にはそんなくだらしないものに支配され
ていた。

馬鹿馬鹿しいと思う、正直。

しかしそこから逃れられないのも、また事実だった。

僕の机には誰も来ない。

昨日のテレビの話だとか、何が好きだとか、そんなたわいもないこ
とを話す権利は僕にはない。

だって、僕は今最下層にいるのだから。

放課後になり僕は鞆の中身をまとめる。

遠くで部活をしている人たちの声が聞こえてくる。

夕日で真っ赤に染まった教室。もちろん、僕以外誰もいない。机に突っ伏してみる。

何かを訴えるように、何かを求めるように、僕はぎゅっと顔を埋める。

一体いつまでこんな生活を続けていけばいいのだろうか。

あと二年間こんな毎日が僕を待っているのか。

変わることはない現実に、僕は闇の底に沈んでしまう。

「ミヤ君？」

「……オーナ」

気がつけばオーナが僕の目の前に立っていた。

「まだ帰ってなかったんだ。これから帰る？ だったら一緒に帰ろうよ！」

「部活は？」

「今日はお休みなんだー。先生が腹痛なんだって」

「あー伊藤先生ね」

オーナは僕の荷物をひょいと持ち上げた。

「さ、帰るよ！ 立って立って！」

「分かったって、立つから」

僕が面倒くさそうに立ち上がると、オーナは嬉しそうに笑った。

「なんか可笑しいか？」

「いや、ミヤ君だなーと思って」

「…意味分かん」

僕はオーナから顔を背けた。

この表情を見られないように。

本当に感謝してるんだ、オーナ。

にくいも、好きのうち

僕の住んでいる家は何の変哲もないアパートだ。

外装はロマンスグレーの落ち着いた色合いで、築三十年ぐらいだろうか。

町に一つあっても何らおかしくないような、そんな建物だ。

そこに僕は住んでいる、一人で。

つまり僕は今一人暮らしをしているわけだ。

なぜ一人暮らしをしているのかは、長くなるので話さないことにしよう。

実に複雑な事情がそこには絡み合って存在している。

一人暮らしというのは楽なようで、実は結構しんどい。

ご飯も一人で作らなければいけないし、掃除や洗濯も自分でしなければいけない。

ご飯を食べ、洗濯機を回し、僕は一服することにした。

気がつくともうオーナからメールが来ていた。

「ミヤ君、明日ヒマかな？ 良かったら宿題一緒にやらない？
分からない問題がたくさんあるんだ（涙）」

僕は嬉しくなって少しはにかんだ。

「あれ、まだメールが来てる……」

携帯にはもう一件メールが来ていた。しかもお昼に来ていたメールアドレスと一緒にだ。

「またこの人添付データ送ってきてるよ…」

ブルルルル

手の中で携帯が震える。

「またメールか、どういうことだよ」

早く出るとばかりに、何通もメールが送られてくる。

「分かったから、見りゃいいんだろ…」

僕はそのメールを開けたことを後に後悔すると共に、感謝することになる。

ポチリ

本文が表示される。

「いつまで待たす気じゃっ！ 馬鹿者！」

添付メールが開かれる。

僕は一瞬どうなったのか分からなかった。

自分が目を閉じていることに、ようやく気づけたのは目の前が真っ暗だったからだ。

恐る恐る眼を開こうとすると、眩しい光が感じられた。

白くて、所々レモン色の光が微かに混じるそんな色。

ずっと大切にしている宝石箱を開けてしまったかのような、そんな
感覚。

キラキラというのは語彙が少ないと言われそうだが、本当にキラキラ
ラしている。

僕は思った。

「綺麗だ」

最初はきつい光だったが、徐々に弱まってきた。
それにつられて僕の目もだんだん開いてきた。

しかし、その目はより大きく見開かれることになる。

だって信じられるか？

目の前に、僕の目の前に……

……小学生くらいの女の子がいるんだから

ほんとのことなのか？

目の前には小学生くらいの女の子。
きつと今僕の口はあんぐりと開いているはずだ。

「……………え？」

「何で、すぐ開かなかったのじゃ」

「……………は？」

ブチっ

「だーかーらー！！！！！！！！ なぜすぐにメールを開かなかったのかと聞いておるのじゃ！！！！！！！！ この馬鹿者が！！！」

いきなり大声を出された。

メールを開かなかった？ つまり、それはどうということだ？

僕の元に一通のメール。知らないメルアド。データが添付されていて。

それを、開きました。

「そしたら、女の子が出てきました…………… って納得出来るわけ無いだろ！ はあ？ これどういう状況！？ おかしいだろ！？」

「何をぐちぐち言っておるのだ」

「いや、明らかにおかしいから！ 何でキミいるの！？ ていうか誰！？ 僕はただメールを開いただけで、女の子を呼んだ覚えは無いんだけど！」

「黙らんか、馬鹿者。わらわは自分の意志でここに来た」

え？

「わらわ？」

「わらわのことじゃ。わらわ」

「ああ自分の事が」

何て古風な呼び方。今時そんな自称詞を使ってる人なんて初めて見たよ。

「ってそうじゃない！ 自分の意志で来たってどういうこと！？」

「わらわはお前を選んでやった。この地上界で暮らすための里親としてな。というわけで、わらわを養うのじゃ」

ああもう何を言っているのか分からない。

「今日からお前はわらわの翁おきなじゃ。しっかりわらわを世話するよう
に」

誰か僕にこの状況を説明して下さいますか？

へんなことになりました

「お前はわらわの翁」発言。

この衝撃的な言葉を残して、女の子はすやすやと眠ってしまった。急にばたりと倒れるものだから、ビックリしたことこの上ない。かなり疲れていたのだろうか目の下に隈ができていた。僕も色々考えなければいけなかった。しかし頭の方がショートしてしまい、気が付いたら僕も夢の世界に引きずり込まれていた

次の日

昨日のことは夢でしたー。
お騒がせしてごめんなさいー。

……なんてことにはならなかった。

僕の横には小学生くらいの女の子が猫のように丸まって寝ている。

……夢じゃなかった……

ピンポーン ピンポーン

インターフォンが僕の意識を一気に覚醒させる。

「おはよーミヤ君！ 昨日メールしたんだけど、見てなかったかな

？」

オーナが勢いよく部屋に駆け込んできた。

ああ僕の日常が戻ってきた。

「ちよつとミヤ君。まだ寝てるの？ 意識がついていていないよ？」

「あ……オーナ」

寝癖を手で撫でながら、僕はそのそと起きあがる。

今日一日の開始だ。普通の、ごく普通の。

「ねーミヤ君。この子誰？」

「……あ？」

オーナが指さした方を見ると、やはり昨日の女の子。

……現実でした。

「はああああ？ やつぱり、リアルか！？ リアルなんだな！？」

「可愛いねー。着物着てるし、なんか昔のお姫様みたいだねー」

「いや、おかしいから！ なんか疑ってよ！」

「肌白いねー。いいなあこんな美人さんに生まれたかったよー」

聞きちゃいねえ。

「……ん？」

急に聞こえてきた騒音が彼女の意識を現実に戻しつつあった。

まだ寝ていたいとばかりに目をこすりながらも、ゆっくりと体を起こし始めた。

「翁、お茶を用意せい」

……は？

「お茶、じゃ。聞こえなかったのか？」

「ミヤ君、お茶だってー」

いやいや。

「馬鹿者！ 早うせんか！」

「早くしたほうがいいんじゃないかな？」

「あ……はい」

ああ情けない僕のパシリ魂。

自分の残念な姿に心底嫌悪感を抱きながらも、いそいそと麦茶を用意する己がいることはまた事実であった

とんでもないな

お茶を飲んで一服しよう。

疲れているときにはお茶が一番だ。

リラックス効果抜群だし、ストレスを抱える現代人には持ってこいだ。

お茶請けなんかもあれば更に良い。

「……で、どういふことが説明して頂けないでしょうか？」

僕は目の前にいる小さな戦国姫に話しかけた。

「わらわがどうして来たかじゃと？」

女の子はお茶をすすりながら、こちらを見た。

今更ながら女の子の容貌について説明しよう。

髪型はおかつぱ頭。市松人形のようなだ。

肌は日焼けを知らないがごとく、白い。

浴衣のような服を着ており、袖がお茶を飲むたびひらひらと揺れている。

印象的なのは、目。

何も悪いことをしていないのに、こちらに罪悪感を感じさせる、威圧感のある目。

「もともとわらわは電腦世界に住んでいる住人じゃ。とある事情があつて、そこから出なくてはいけなくなったのじゃ」

「……電腦世界」

「そつじゃ」

「へー、どんなところなんだろうねミヤ君」

オーナが楽しそうに声を上げる。

いや、そう素直に受け止められるか。

「電腦世界っていうのは何だ？」

「ネットの中に存在する四次元空間という言い方が正しいじゃろうか。今の現代人では未だはいることの出来ぬ未知の領域じゃ。我等はそこに居場所を見つけ、そこで暮らしてきた」

「……」

つまりあれか。

どら もんの引き出しよろしく、ネットの空間に四次元空間があつて、そこから来ちゃいました っていう訳か。

このとんでも戦国少女が。

今の現代人でも理解できるレベルはそこまでだろう、多分。

「まあ話は分かった」

「すごいね、ミヤ君！ 今の説明を分かったなんて！」

「いや、ほんのパーセントぐらいだけど……」

「それなら話は早い。さすがは我が翁じゃ」

……。

「いや、何で僕がキミを養う事になるわけ！？ それは断固反対だ

！ 第一どこに住むわけ！？」

「ここに決まっておろう？ わらわは五目ご飯が好きじゃ。週に一

回は出して欲しい」

「いや、無理だから！ 絶対無理だ！」

ここは断固主張しなければ。
見ず知らずの女の子をいきなり養わなければいけないなんて、どこの誰が決めたって言うんだ。
しかも電脳世界から来ただとか、素性も怪しい。
第一性格がかなりお嬢様気質だ。僕には絶対に合いそうもない。
諸々のことを考慮しても、これは絶対おかしい。
異議あり！

「……主も独りぼっちになったわらわを見捨てるというのか」
「え？」

「……やはりわらわが悪いのか？」

さっきまでの勢いはどこに行ったのか、急にしょんぼりし始めた。
唇をかみしめ、下を向いている。

「ミヤ君……」

オーナがおろおろして僕を見返す。

正直言つてこの流れはかなり悪い。
フラグが立ちまくっている。

僕の世界よ、強くあれ。負けるんじゃない。勝て、勝つんだ僕！

「……しばらくだけだぞ」

口から出たのは正反対の言葉。やっぱり言ってしまった……

少女はまるで神様を見るかのように僕を見つめた。
その視線が濁り気もなく、ただひたすら純粹だったので、僕はどぎ

まぎする。

この時初めて僕は、少女が美しいことに気が付いた。

「ありがとう」

その時の笑顔を僕はいつまでも忘れないだろう

「そつだ！ 名前は何て言うの？」

「名前……」

「確かに名前が無いと、呼びにくいな」

「名前は………忘れた」

「じゃあさ、かぐや姫みたいだから『カグヤ』っていうのはどうかな？」

「なんでかぐや姫みたいなんだよ……」

「だってー！ 電脳世界から来たお姫様だよ！ かぐや姫ぴったりじゃん！」

「その思考回路が分からん……」

「カグヤ……カグヤでいい」

「じゃあ決まり！ カグヤちゃんね！」

オーナが手を叩いた。何だか分からないが、『カグヤ』に落ち着いたらしい。

「じゃあよろしくな、カグヤ」

「………うん」

その時僕は初めて窓から空を見た。

偶然か必然か、そこには満月の月がこちらを見守るようにまばゆく
光っていた

ちがうんだってば

「翁、そちどこへ行くのじゃ」

「学校」

「学校とは何じゃ？ 食べ物か？」

「違う、勉強するところ」

「では、わらわも行く」

……え？

というわけで何が何だかさっぱり分からないまま、カグヤを学校に連れてくることになった榊ミヤツコ少年（高校二年生）である。

おい、何で三人称なんだよ。

ここは一人称で進める小説だから、僕でいいんだよ。

「ねーミヤ君、何一人でツツコミしてるのー？ あつもしかして漫才の練習？ じゃあ私も付き合わせてよ！ 私はボケかなあ？」
オーナは言われなくてもボケだ。

「おい、翁！ まだ教室とやらに着かんのか！ 妙に遠いぞ！」

「やっと校門くぐったところだろ……」

それにしても周りの視線が痛い。

僕、オーナは制服を着ているし、何よりこの生徒だから、何の問題も無い。

問題は「こいつ」だ。

どう見ても小学生にしか見えないのに、なぜか高校に来ているおかしな子にしか見えない。

遠目から見れば僕とオーナのどちらかの妹とでも見えているのだからか。

それにしてもオーナに普通の女の子の服を借りておいて良かった。これで着物だったら、余計おかしな事になる。

「じゃあ、ミヤ君。後でねー」

オーナが手を振りながら、隣の教室へ入っていった。

「？ オーナとは違う『教室』なのか？」

「そ。僕は一組で、オーナは二組だ」

それを聞くとカグヤはしょんぼりと肩を落とした。

(オーナのことは結構好きなんだよなあ…)

ほとんど奴隷扱いである自分とのギャップに内心傷つく。

ガラガラッ

ドアを開けると、そこにはいつものイジメツ子達。

さて、今日も平凡な僕のパシリ生活が幕を開ける

「ここが翁が言う教室じゃな！ つまらなそうな所じゃな！」

仁王立ちで教室を見回すカグヤ。

突然のことに僕はもちろんのこと、クラス中が茫然とする。

(えっあの子、誰？ 榊の妹？)

(いや、似てないだろ)

(というか普通小学生を学校に連れてこないだろ)

クラス中の心の声が聞こえるようだ。

「なんじゃこれは！ 白い棒で文字が書けるのか！ 酷い仮名文字じゃの！」

そんなことは気にもせずカグヤは黒板の前に行き、チョークでガリガリと字を書き始めた。

「おい出席とるぞー。座れー」

先生が教室に入ってくる。

あー駄目。今入ってきちゃだめだーせんせい！
心の中で叫ぶが届くはずもない。

「……………」

教壇には小学生くらいの少女。

黒髪、おかつぱ頭、鷹のような鋭い目、腕組み。

少女は不敵に笑い、そしてこう言い放った。

「わらわは今日からこの生徒とやらになる！ 皆の衆、よくわらわの面倒を見るように！」

黒板には『月影カグヤ』とごく丁寧に名前まで。

あまりの出来事に全員言葉を失うのは、至極当然のことであった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2986v/>

名をば榊ミヤツコとなむ言いける。

2011年10月5日20時40分発行